

複合施設と図書館

山 崎 麻 未

1. はじめに

本稿は、公共図書館が将来に渡って、人々に利用され続けるにはどのような形がよいのか、その一つの道として「複合施設」を取り上げて論じたものである。従来、図書館にとって「複合施設」の中に建設されることは、敬遠されるべきことであった。しかし、社会の変化と共に、図書館の変化が求められる今、「複合施設の図書館」という形は新たな可能性として考えることができるのではないだろうか。これまでの見解を踏まえた上で、複合施設に図書館が建設されることに対する利点を明らかにしながら、「複合施設の図書館」がこれから先、肯定的な一つの可能性として示すことができるかについて考えていきたい。

2. 複合施設の定義

「複合施設」について、辞典ではそれぞれ次のようになっている。『広辞苑第五版』では「複合」とは「2種類以上のものが合わさって一つとなること」^[1]、また「複合建築」は「二つ以上の用途部分を含む建築物の総称。」^[1]である。『最新図書館用語辞典』では、次のように定義される。「複合施設（ふくごうしせつ）一つの建物の中に異なった目的と機能を持った施設を含めることおよびその建物。図書館が他の公共施設と併設される場合、その形態や建物のことをいう場合が多い。」^[2]。これと同様に、『図書館情報学大辞典第3版』では「複合施設 complex facility 図書館施設が他の施設と同じ建物にある場合のこと。公共図書館について用いられることが多い。」^[3]とされる。また、建築学の観点から『建築学用語辞典第2版』では次のように定義される。「複合施設 facilities complex 異なるサービスを行う施設を一体的に計画し、それによって各種サービスの高度化、行きやすさ向上などの集積効果が得られるように作られた施設」^[4]となっている。これを踏まえて、本稿では異なるサービスを提供することのできる施設が、2つ以上複数同じ建物内にあるものを複合施設と定義することとする。

本稿では他に、複合施設の図書館と対比させる形で、図書館が単独で設立されているものを「単独館」とする。図書館が単独で建築されているものの呼称は、論文によって「単独館」と「独立館」の2種類が見受けられる。しかし、図書館学と建築学の辞典にはどちらの呼称も発見できない。『広辞苑第五版』によれば、単独とは「ただ一つだけであること。ひとり

だけであること。』⁵⁾であり、独立とは「①それだけの力で立っていること。③単独で存在すること。』⁶⁾とされている。どちらも似たような意味である。本稿では、「図書館が単体で建っていること」を表現したいということと、図書館界で最初の複合施設における図書館の調査報告の結論で「単独の建物」という表現が使用されていることを参考に、「単独館」と統一して用いることとする。

3. 何故、複合施設に着目するのか

理由は次の二点である。一つ目は、利用者に訪れてもらうには、図書館はアクセスのしやすい場所に立地するべきであるという点、二つ目は図書館が多様化するために、一つの方法として「複合」が新たな形をもたらすのではないか、という点である。

3. 1 アクセスのしやすい場所とは

筆者は図書館がこれから先、生き残っていくためには、多くの利用者を獲得する必要があると考える。「日本の図書館 2008」の統計資料と、文部科学省のホームページによれば、公立図書館における資料費の予算額は1998年から2007年まで減額の一途を辿っている。この間、図書館数が増加していることを踏まえると、図書館一館あたりに充てられている資料費の予算は予算額の減少ペースを超えて減っているということがわかる。この先、図書館から利用者が減少すれば、更に図書館に割かれる予算は減額されるに違いない。筆者が危惧するのは、このままいけばいずれ図書館が必要のない存在として消えていくのではないかということである。図書館が必要な存在であることを証明するには、より多くの利用者の支持を得る必要がある。

そのためには、まず図書館へのアクセスのしやすさが必要である。電車やバスなど、誰もが使える公共交通機関の結節点の近くに図書館があれば、それだけ利用者が気軽に立ち寄りやすい環境になると考える。加えて、現在、地方ではコンパクトシティ化の流れがある。2025年には東京都を含め全ての自治体で人口の減少化現象が起り始めるため、高齢者や交通弱者を抱えた自治体では益々この流れが進むと考えられる。こうした状況の中で、自動車社会は人々にとって、実状にそぐわず、将来的には公共交通機関の復権と人々の帰郷がおこるのではないかと考えている。また、コンパクトシティ化が進めばますます公共交通機関を人々が利用しやすい状況が整っていく。従って、日本社会の将来像から推測しても、図書館が公共交通機関の側に位置することは、理に適っていると言える。

以上のような理由から、公共交通機関の近くに図書館は立地すべきであると考えられる。しかしながら、そのような場所に図書館を単独で建設するのは難しい、というのが現実問題として存在する。多くの場合、公共交通機関は街の中心地に整備されており、そこに施設を建設するには用地の確保など障害があるからである。しかし、複合施設の図書館の建設ならば、状況を打開する可能性が考えられるのである

3. 2 図書館の多様化

情報の種類が多様化し、利用者自身が情報を様々な媒体からより手軽に入手できるようになると、図書館側もそれに即した対応をしなければいけなくなった。利用者のニーズに応えるために、特定の利用者層に向けたサービス展開を行ったり、その図書館ならではの特色を出そうとしたのである。しかし、利用者の多様なニーズにもっと応えるためには、現在のサービスを大切にしつつも、図書館も多様化して他のアプローチの方法を探す必要があるのではないだろうか。このような状況から考えると、図書館が単独で行える業務やサービスはある程度想定されており、新たな状況を作るには外部要因が必要となることが考えられる。そこで注目したのが複合施設における図書館である。図書館は単独で存在する時に比べ、複合施設の中に存在する場合は様々な状況が想定され、そのあり方も多様化すると考えたのである。

4. 複合施設の図書館に対する図書館界のこれまでの傾向

図書館界で、はじめに複合施設の中の図書館が調査、発表されたのは1981年11月の『図書館雑誌』に掲載された「併設・複合館の状況について—アンケート調査の集計結果から—」においてである。ここでは「図書館の建物は独立した専用の建物であることが良いのはいうまでもない」という言葉から始まり、結論部分でも「総合して図書館は、単独の建物をもっとも望まれる」と締めくくられている。主に問題点をまとめて挙げ、利点は「さまざまな要素を集めれば便利だとする考え方」と表現している。複合施設は完全に否定されているのである。この論文以降、図書館界では複合施設における図書館の在りようを否定的に見る傾向があった。

多くの論文が複合施設を否定する理由をまとめると、次の二点になる。一つ目は、他の施設と同じ建物に図書館がつくられるため、建築・設計上の制約がある点である。この点については、顕在化する問題がある程度想定できるため、建築の初期段階から図書館側が関わることで、対処可能な問題である。二つ目は、それぞれの施設の性格や利用者に違いがあるために騒音や臭気に代表される弊害が起こるなど、図書館としての空間が損なわれたり、管理する時に施設同士の調整が必要になるという、運営上の点である。この点については、建築技術の向上により年々改善されると共に、図書館を運営する際に図書館長となる人物が、業務に対する最低限の理解を持ち、他施設と連携をとることで解決できる問題である。

実際には、前述した1981年に掲載された調査が行われる前年に、複合施設の図書館は全体の42%であるという数的な結果が出ている。このことから考え、複合施設の図書館には問題点を目を瞑ってもその形を選択する理由があると考えられる。また、その後の研究でこれまで問題点として挙げられたいくつかの面は否定され、利点とされる面も出てきている。

5. 自治体が複合施設に図書館を建設する理由

公共図書館は基本的には各自治体がその設置計画から運営までを行っている。自治体側は

単独館には無い何かを期待し、複合施設に図書館を建設していると推測できる。それはどのような理由なのだろうか。

5. 1 財政経費の軽減

一つ目は財政経費の軽減である。複合化することによる建物管理費の軽減化、少人数の職員での管理運用、共用施設部分の建物面積の削減等の効率的運用が可能となる。自治体の財政における図書館の費用は年々減少しており、このことから考えても複合化は一つ的手段として用いることができると考えられる。また、簡単な業務を別施設の職員が手伝うことによる業務の効率化も行える。「複合施設で働いている図書館職員の報告」では武蔵村山市立図書館で働いている国分一也氏がこのことについて言及している。国分氏の働く図書館では同施設内に入っている地区会館の職員が、外に行く際に「ついで」に交換便を持って行く。図書館員は、本来ならば自分で交換便を持って行く時間に図書館内の別業務をすることが可能になるのである。また、地区会館の職員は「わざわざ」交換便を持って行くのではなく、自分の用事の「ついで」に持って行ってくれるのである。このように、各職員の負担にならぬ程度に業務の簡単な部分を手伝えれば、効率的に他の業務を行うことができると考えられる。

5. 2 用地の確保

二つ目は用地の確保である。図書館を建設するにはある程度の規模の土地が必要である。しかし、土地は高価であり、施設用の広い土地を確保するのはなかなか難しい。加えて、図書館以外の公共施設の老朽化にともなう更新や新設などの要望もあり、施設需要は増大している。こういったことから図書館の用地の獲得は難しい状況にある。もしも、公共施設に相応しい用地が確保できれば、一つの施設のためだけに利用するのではなく、建築制限ぎりぎりまで高度利用することにより有効に活用し、用地取得問題を少しでも緩和できる方が良い。深刻化する用地獲得の問題は、施設の複合化に拍車をかけつつある。

5. 3 街の中心的施設

三つ目は地域づくりや地域活性化を目的とした街の中心的施設を作ることである。まちづくりの観点において、図書館はそのコミュニティの中心的施設となり、シンボルの役割を担う施設となることが可能である。また、その建物が、複数の施設が入った大規模なものであれば、人々に効果的なインパクトを与える。主要な機能を揃えた公共施設をいくつか同じ建物内に存在させることによって市民を集め、その街を活性化させようというのである。この点については、昨今の地方の状況と中心市街地の活性化の流れを踏まえて説明をしたい。

5. 3. 1 中心市街地活性化

地方自治体にとって、モータリゼーションと共に中心市街地が衰退していったのは深刻な問題である。大型の商業施設など生活に必要な施設がこぞって郊外に建設されたことで、駅

前などの街の中心地であった場所から人の流れが消失していったのである。この動きは図書館を含めた公共施設も例外では無い。街の中心地では土地の確保が難しく、大規模な施設の建設がしにくいことから、比較的用地の手に入れやすい郊外へ施設が流出していった。このように、市民の利用する施設が郊外に分散したことで、中心市街地は閑散とし結果的に空洞化を招いてしまったのである。こうした事態に対し、自治体は中心市街地を再開発するなど、郊外から中心市街地に再び人の流れとにぎわいを取り戻そうとしているのである。

街に人が集えば、新たな商業など街の活気が更に高まる可能性が高い。内閣官房地域活性化統合事務局のホームページが出している事例集によれば、「市街地の整備・改善」、「都市福利施設の整備」、「街なか居住の推進」、「商業の活性化」、「公共交通の活性化などの一体的な推進」、と活性化の方法は様々あり、商業施設展開から地域資源の活用まで多岐にわたる。地域ごとに活性化の方法は異なり、図書館はこの中で都市福利施設に分類され、中心市街地活性化に一役買う存在として注目されている。

5. 3. 2 活性化における図書館の役割

図書館は日常的に利用することのできる施設であり、老若男女利用層を選ぶことなく、幅広い世代の利用者を見込むことができる。安定した集客能力を持ち、人々が恒常的に集う場所である。つまり、中心市街地に図書館があれば、そこに郊外からの利用者の流れを作ることが可能なのである。更に、公共施設が複合化すれば、必要な機能が一ヶ所に集中しているため、人々を街へと招きやすい要因となる。

実際に、図書館も入った複合型の公共施設を建設することにより、人々の流れを創出できた例には次のようなものがある。

5. 4 せんだいメディアテーク

宮城県仙台市にできた、せんだいメディアテークは、図書館、ギャラリー、映像文化事業、目や耳の不自由な方々のための情報提供事業の4つの基本的な機能を持つ複合型の生涯学習施設として、2001年1月にオープンした。「さまざまなメディアの機能を融合した全く新しいタイプの公共文化施設」として建設され、新しいコンセプトによる施設名称として、「メディアテーク」（メディアの棚といった意味合いの伝語）という名が提案された。この施設が実際に運営されるようになって、近隣には次のような相乗効果が出たことについて、仙台教育委員会教育長の奥山恵美子氏はこのように触れている。

近傍に大きな変化をもたらしたのは、かわいいに定常的な人の流れをつくったことだろう。図書館やギャラリーの利点は、コンスタントに人が来るということである。大規模ホールでも、同じような数の人を呼び込むことは可能だが、ホールの場合は、どっと来て、どっと帰ってしまうところが図書館などと違う。満遍なく人が来ることによって、周辺のビルに喫茶店や雑貨屋、アートショップなどおしゃれな店がオープンし、街に新

しい表情が生まれた。⁽⁷⁾

メディアテークにはもともと、生涯学習施設としての機能のほかに、定禅寺地区のまちづくりに寄与することが求められていたため、この効果は狙い通りのものであった。常に一定の人の流れを創出したことが、近隣に商業の活性化を促し、街としての表情を形作ることに成功したのである。メディアテーク自体が街と一体化でできるようにと一階は多目的のイベント広場としたことも、「まちづくり」という点において、メディアテークが重要な役割を果たすことのできるように建設されたことが伺える。まさに、せんだいメディアテークは図書館の入った複合型の公共施設としての成功例であると言えるだろう。

6. 複合施設に建設される図書館の利点

それでは、複合施設に建設される図書館側の利点は何だろうか。自治体側の理由と共に「同じ建物内にある施設の職員同士が負担にならない程度に作業を手伝える点」については既に言及した。その他には次のような点が挙げられる。

6. 1 図書館として適切な場所

一つ目は場所である。図書館を単独で作るだけでは手に入らなかった好条件の用地が、複合化することで手に入る可能性がある。「中心市街地活性化と図書館」において、管孝能氏は図書館の文化施設としての役割について触れながら、中心市街地に図書館を建設することの意義についてこのように述べる。

図書館を中心市街地の枢要な場所に配置することにより、文化的情報を発信して、街の雰囲気を変え、来街を促進し、人の流れを変え、商業の活性化を後押しする。図書館にとっても前に述べたように（注1）中心市街地に中核となる図書館を立地することは、中心市街地の住民だけでなく、広い範囲から都心に集まってくる人たちの利用を誘発し「市民の図書館」が目指す「全域サービス」に対しても有効で、図書館への行政投資効果を高めることになる。

（注1）図書館を街の真ん中に配置できた例は、もともとまとまった公用地が街の中心部にあったとか、再開発でスペースが確保できたとか幸運に恵まれた場合を除いて、残念ながらこれまでそう多くはなかった。⁽⁸⁾

図書館にとっては、より多くの利用者へサービスを展開することができ、加えて行政へのアピールにも繋がるというのである。これはひいては図書館の存続や財政面へも影響すると考えられる。

6. 2 複合施設としての動線

二つ目は人の流れ、つまり動線である。複合施設では、図書館ではなく、同じ建物内に入っている別施設を目的として訪れた利用者が、「ついで」に図書館に寄っていく状況が想定され、利用者が増えることが期待できる。また、これまでは図書館がどこに存在するか知らなかった人が、他施設を利用したときにその存在を知ること、図書館の利用に繋がることも期待できる。他施設の利用者に「図書館」をPRする、いわば広告の効果が想定できるのである。

この立ち寄り効果や広告の効果は、同じ空間内に施設があるからこそ実現する話であると考えられる。施設同士があさっての方向に位置しては「ついで」に寄るという行為は成立せず、その存在を知ること難しいだろう。

同空間内を効果的に使用した立ち寄り効果について、せんだいメディアテークでの例を挙げる。「5. 4 せんだいメディアテーク」で紹介した奥山氏はメディアテーク内で次のような効果があったことを述べている。メディアテークでは当初、図書館利用者や図書館職員から図書館は一階に建築して欲しいという要望が出されていた。しかし、「まちづくり」の観点から、一階は多目的イベント広場となった。実際に開館してみると、図書館が一階ではなく、二階～四階に位置し、その上の五・六階がギャラリー、七階にAV資料の貸出・閲覧スペースと上階に施設を位置させることで利用者は思わぬ動きをした。

開館後の利用者の動きを見ていると、図書館に通う利用者が、動線の関係上、1階のイベント広場を眺めながらエスカレーターやエレベーターに向かうため、思わぬPR効果があがっているということがわかった。催しを知らないで来た人が、飛び込みで参加したり、コンサートに耳を傾けて帰る人が増えるなど、普通の壁で仕切られたホールでは起こらない「ショーウィンドウ効果」とでも呼ぶべき事態が発生したのである。⁽⁷⁾

これは、図書館を目的とした利用者がイベントへ「ついで」に立ち寄ったケースである。空間内の動線を上手に利用して、訪れた人々の興味を刺激し、イベントをPRしている。このように同空間内に別施設があることで、利用者の流れを作ることができるという点では、工夫次第で図書館にも利用者呼び込むことができるのではないかと考えられる。

6. 3 施設同士の協力による催物

三つ目は同じ建物の中に入っている施設同士で協力して催し物を行うことができる点である。催し物は単独館でも行われてきた。企画展示や、ワークショップなどがそれである。図書館にとってこのような企画は大切なもので、生涯学習を細やかにサポートしたり、利用者の知的欲求を満たすという点で非常に有効な手段となる。利用者が本への興味をより持つきっかけともなる。図書館での企画は利用者へ読書へのアプローチをするツールであり、広報手段でもあるのである。

しかし、そこに訪れる人々は図書館が目的の利用者である。これに比べ、複合施設の図書館では同じ建物内にある別施設とタイアップすることで、本来ならば図書館の利用者に繋がらなかった別施設の利用者という新規層を獲得できる可能性がある。次のような例がある。

6. 3. 1 美術館との協力——つくば市立中央図書館——

茨城県の南西部に位置するつくば市では、1990年につくば文化会館アルス内につくば市立中央図書館が誕生した。同建物内には茨城県近代美術館つくば分館（つくば美術館）があり、図書館ではこの美術館と協力して何かしたいという話になった。当時のことをつくば市立中央図書館館長の吉田昭氏は「地域密着・住民参加の図書館づくり つくば市立中央図書館の改革」で次のように語る。

美術館から、2004年9月に「安野光雅の世界展」で絵本の原画を展示するが、当館が所蔵する絵本を展示用に貸し出してほしいこと、毎週土曜日にその朗読会を行いたいので協力してほしい旨の申し出があった。さっそく、朗読ボランティアにお願いする一方、図書館で未所蔵となっている安野氏の著作を急ぎ購入し、美術館に団体貸出をするともに、複本を当館の展示コーナーに別置のうえ、所蔵リストのチラシを美術館来館者に配布した。この展覧会の入館者は1万4000人近く、つくば美術館15年の歴史のなかで最多の入館者数を記録したが、当館においても、会期中の1か月に貸し出しされた安野氏の著作は、会期前1ヶ月の7.5倍、525冊に及んだ。⁹⁾

この例では、同じ施設の中に入っている美術館と協力して催し物を行っている。この図書館は美術書の収集と保存に力を入れてきたという強みがあり、それを活かして、美術館の展示によって知的好奇心を刺激された利用者達のニーズに応えているのである。「安野光雅の世界展」の会期中に貸し出された安野氏の著作が、会期前よりも回転率が何倍も良くなっているのがその証拠であろう。図書館側の思惑が当たったのである。

6. 3. 2 豊島区立中央図書館——劇場との協力——

豊島区立中央図書館は2007年7月にリニューアルオープンした。この図書館は東池袋の再開発地域に新築された「ライズアリーナ」の四、五階にある。同じビル内の二、三階は、豊島区の舞台芸術交流センター「あうるすぽっと」が入り、図書館と劇場が同じ建物の中にある、複合施設である。

図書館では、まず開館記念に小沢昭一氏に劇場で講演会をしてもらい、その関連の本41冊を展示した。これらの本は4月～6月は全部で44回貸し出されていた。しかし、講演会とそれに合わせた図書の展示をしたところ7月～10月までで146回も貸し出された。同じく劇場で行われたミュージカル関係の本を展示したときも12冊の展示で7回（借りられていない本もあった）しかなかった貸し出しが30回に増えていた。

劇場「あうるすぽっと」ではこけら落とし公演として舞台「朱雀家の滅亡」が上演された。これに先立ち、図書館ではその舞台の演出家の講演会「演出家的 本の読み方」と、原作者である三島由紀夫の人物像についての講演会「三島由紀夫と学習院」が行われた。リニューアルオープン当時、筆者はこの図書館で企画を担当していた豊島区立中央図書館・企画調整担当係長に話を聞きに行った。その話によれば、「朱雀家の滅亡」が劇場「あうるすぽっと」で上演されるにあたって、それを盛り上げることはできないか、と図書館側は考えた。こうしてできたのが、先に挙げた二つの企画である。「三島由紀夫と学習院」では三島由紀夫について研究をし、白樺派についての著作もある、作家・関川夏央氏が「三島由紀夫とはどういった人物であったのかと、三島由紀夫が学習院から受けた影響について講演した。また、「演出家的 本の読み方」では「朱雀家の滅亡」で舞台の演出をした、演出家・宮田慶子氏が演出家的な本の読み方を講演した。これは、演出家はどのように本を掘り下げて読むのか、その方法を一般の人も本を楽しむ参考にできるのではないか、という視点から生まれた企画であった。また、これらの講演に際し、図書館では三島由紀夫の本や講演者である関川氏の本を展示している。

豊島区立中央図書館は、最終的に「あうるすぽっと」と協力し、豊島区全体の文化情報発信拠点となることを大きなコンセプトとしている。膨大な量の資料をただ並べるだけではなく、いかに利用者に活用してもらうか、図書館と劇場がタイアップした形で行われた企画はそのためのきっかけ作りでもある。筆者が話を伺った担当係長は、「図書館を使ったことの無い方には図書館ってこんなにいいところだ、とわかって頂きたい。また、これまで本が好きだから目に留まったものを読む、という形で図書館を利用してきた方にはちょっと目的意識を持って利用すれば図書館は今よりもっと楽しいところだ、とわかってもらえると嬉しい。」と述べていた。

この例では、同じ建物内に入った図書館と劇場が協力している。劇場を利用した人々が公演中の登場人物や原作に興味を持つ。すると、劇場の入っている建物の中には図書館もあり、公演に合わせた本の展示が行われている。劇場で知的好奇心をくすぐられた利用者は、そのまま図書館の利用者となるのである。この図書館の劇場との連動企画は、「舞台をいかに楽しむか」に加え、劇場での公演を契機にいかに図書の利用へ繋げるかという点に着目している。公演を機に図書館へ興味を持って利用した人には読書への導きとなり、逆に図書館を利用したことによって公演を知った利用者にとっては、これまでとは違った「目的意識」を持った高度な読書テクニックを身につけてもらう機会となる。図書館側にも十分な利点が期待できるのである。

6. 3. 3 二つの例から

いずれも、「図書館から美術館へ、美術館から図書館へ」という流れと、「図書館から劇場へ、劇場から図書館へ」という流れを、企画を通して人為的に創り出した例である。「5. 2 複合施設としての動線」で紹介した利点は、同じ建物内に別施設が入るだけで期待でき

る効果であった。それに比べ、この施設同士の「協力」は明確な意図を持って行われているので、図書館側にもほぼ意図した通りの効果が期待できるだろう。図書館側は、協力した施設の利用者を新たな利用者として獲得する可能性が十分あると考えられる。また、同じ空間内に施設があることで、利用者も建物の中を回遊するような流れに自然となり、どちらの施設も利用しやすいと考えられる。

これまでの図書館は利用者がどのようなサービスを求め、それにどのように応えれば良いのか模索することが時代の変化と共に必要なことであった。しかし、これらの同じ建物内の施設同士で協力し獲得した利用者は、図書館自身が利用者のニーズを創り出した結果であると言える。今後はこのように利用者はこちらから仕掛けて需要を創り出すことが、図書館に必要ではないかと考える。

7. おわりに

複合施設はこれから先の図書館の姿として、一つの肯定的な姿と成り得るのではないだろうか。複合施設の図書館は必ずしも悪いものではない。積極的に動けば、複合することはむしろ図書館側にとって新たな状況を作り出し、好転する可能性を大に持っている。本稿で指摘した、新たな利用者層の獲得や、図書館側が利用者の需要を創出できる点は、複合したからこそ生まれてくるポジティブな要因である。今後図書館がより多くの人々に利用してもらう糸口になると考えられる。

複合施設に建設されたことを免罪符に、「複合したから駄目なのだ」と諦めたり不満を漏らすだけで、せっかくの好機を無駄にして終わることはもったいないことである。情報が多様化する現代の社会において、図書館は積極的に複合し、その在り方も多様化して他と差別化をはかり、利用者に応じて行くことが時代に求められる姿ではないだろうか。

これからの社会状況を考えれば、複合施設はますます増えていくことが考えられる。自治体における財政難には拍車がかかり、中心市街地の活性化は現在進行形で増えている案件だからである。このような状況において、もはや「図書館は単独でなくては」というこだわりは捨てねばならないのではなからうか。複合施設であっても、図書館を必要とするところに建設し、適切に住民にサービスをすることが図書館の一番の使命であるからである。図書館側は複合施設の利点に目を向け、何事にもポジティブな考え方を持って行動することが求められる。そうすることがより良い状況を作り出すことに繋がるからである。将来にわたって多くの人々に図書館が利用されるために、複合施設の図書館が一つの可能性として図書館界に受け入れられていくことを期待したい。

引用文献

- (1) 『広辞苑 第五版』新村出 p.2317 1998年
- (2) 『最新 図書館用語大辞典』図書館用語編集委員会 p.486 2004年
- (3) 『図書館情報学用語辞典第3版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 p.213 2007年
- (4) 『建築学用語辞典 第2版』社団法人日本建築学会 p.638 1999年

- (5) 『広辞苑 第五版』新村出 p.1695 1998年
- (6) 『広辞苑 第五版』新村出 p.1913 1998年
- (7) 奥山恵美子 「複合施設が拓く図書館の未来— せんだいメディアテークの実践」『都市問題』第96巻 第9号 p.61-69 2005年
- (8) 管孝能 「中心市街地活性化と図書館」『図書館雑誌』第95巻 第7号 p.474-474 2001年
- (9) 吉田昭 「地域密着・住民参加の図書館づくり— つくば市立中央図書館の改革」『都市問題』第96巻 第9号 p.91-98 2005年

参考文献

1. 富江伸治 「複合・併設における図書館計画」『現代の図書館』第30巻 第2号（通121号）p.86-91 1992年
2. 木野修三 「日立シビックセンター」『現代の図書館』第30巻 第2号（通121号）p.104-105 1992年
3. 本田明 「4館の対する利用者調査からの問題提起」『図書館雑誌』第76巻 第1号 p.30-32 1982年
4. 藤田健一 「複合施設構成による公共図書館発展の可能性について（試論）」『図書館学会年報』第37巻 第3号（通巻106号）p.88-97 1991年
5. 栗原嘉一郎、篠塚宏三他 「討論：複合・併設館における図書館計画をめぐって」『現代の図書館』第30巻 第2号（通121号）p.106-117 1992年
6. 米澤誠 「広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法」『情報の科学と技術』第55巻 第7号 p.305-309 2005年
7. 西川馨 「公共図書館における複合施設化の問題点」『現代の図書館』第27巻 第3号（通巻110号）p.142-148 1989年
8. 池田政弘 「資料収集・提供における図書館の複合機能（試論）」『現代の図書館』第30巻 第2号（通121号）p.124-129 1992年
9. 国分一也 「複合施設で働いている図書館員の報告—武蔵村山市立図書館の場合」『現代の図書館』第30巻 第2号 p.118-123 1992年